

# 華岡青洲撰「丸散便覧」の書誌学的研究

——とくにその成立年に関して——

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成31年1月3日／受理：令和元年9月3日

**要旨：**華岡青洲は1782～5年の京都遊学の初期に鈴木蘭園の門に学んだ。青洲らが筆録した蘭園の旋律に関する講義録によって、青洲が当時「泰」とも名乗り「玄洲」とも号したことが明らかになった。したがって青洲の自筆とは断言できないが「華岡 泰撰」とする写本「丸散便覧」の存在は、その初稿本が遅くとも1782～4年に成立したことを示す。中川修亭と目される友人の要望に応じて書かれた本書は、吉益東洞の十二律方を中心とする31方について処方名、用量、用法を示し、用法について青洲自身の解釈を述べている。1790年に書かれた青洲自筆の「丸散便覧序」によって「丸散便覧」の成立は1790年とされてきたが、初稿本の成立年はそれより6-8年遡ることが明らかになった。

**キーワード：**華岡青洲，華岡 泰，華岡玄洲，丸散便覧，成立年

## 1. はじめに

華岡青洲（以下「青洲」）の著述で刊行されたものは一冊もない。殆どの著作は青洲の口述を門人が筆録したものであるか、青洲らが収集した奇（禁）方を編集した処方集が主であり、これらの他に図譜類や若干の随筆集などが知られている。著書数は春林軒の門人佐藤持敬によって編まれた「華岡氏遺書目録」に呉 秀三が補充したリストによれば72種に上る<sup>1)</sup>。この目録は佐藤の59種に、後に呉が13種を補った形をとっているが、どのような規準に従って記述されたのか全く不詳である。冒頭の5書を記すと「瘍科神書」，「瘍科瑣言」，「産科瑣言」，「婦人抜粹」，「内科撮要方」である。最初の2書の写本が極めて多数現存していることを考慮すると、広く流布した順序に従って記述した形跡が窺われる。しかし、その他の3書は前2書に比較して遺されている写本は少ない。とくに第3番目の「婦人抜粹」は正式な書名とは思われない。冒頭の2書に劣らず書写されて

普及し、多くの写本が現存している「灯下医談」は「華岡氏遺書目録」の25番目、「青洲医談」は26番目に記載されていることを考慮すると、単純に流布の程度による記載順序であると即断することは出来ない。

青洲の主著の成立年を確定することは、青洲の医学の発展や普及の状況、彼の医学思想の萌芽、成長、完成を研究する上で不可欠な条件であるが、残念ながら著述の中で成立年が特定されているのは72書中わずか4書（5.6%，4/72）に過ぎない。古い順から記すと1790年（寛政2）の「丸散便覧」，1791年（寛政3）の「禁方（拾）録」<sup>2)</sup>，1804-5年（文化元-2）の「乳巖治験録」<sup>3)</sup>，1821年（文政4）の「続禁方録」<sup>4)</sup>のみである。これによって青洲の最も初期の研究が非伝統的処方である奇（禁）方の収集から始まったことが理解される。その理由は仁井田好古の「華岡青洲墓誌銘」に「世醫の論ずる所は、舊方に局み、經語に泥んで、之を活用する能わず。」（原漢文）<sup>5)</sup>とあるように、青洲は「傷寒論」などに見られる伝統的処

方のみでは多様な疾病に対する十全の治療ができないと考えたからであった。

成立年が知られている上記の4著の中で最も古い「丸散便覧」は、青洲の奇（禁）方収集の開始時期を明示しているのが極めて重要な意義を有する。青洲が京都遊学を終えて故郷に帰ったのは1785年（天明5）2月で、その4カ月後に父の直道（なおみち、「じきどう」ではない）が没しているから、それから数えると1790年の「丸散便覧」の撰まで約5年の歳月が経過している。このことから著者は、青洲が帰郷後間もなく父の死に遭い、その喪に服した後、漸く周囲の環境が落ち着いた1790年の少し前から奇（禁）方の収集と研究を開始したと考えていた。しかし、著者は青洲がすでに京都滞在中の1782-4年（天明2-4）に奇（禁）方の研究を始めていたことを示唆する「丸散便覧」の一写本を最近見出した。これまでの「丸散便覧」の成立年を1790年とする定説を改め、それよりも6-8年も以前とする新知見である。併せて青洲が京都遊学時代にこれまで全く知られていなかった名と号を用いていたことも近年明らかになった。これらの知見は従来全く不詳とされてきた青洲の「麻沸散」開発の開始時期の推定にも資すると思われる、青洲研究において大きな進歩であると考えられるので報告する。

## 2. 「丸散便覧」に関する先行研究

青洲の著述に関する最も古い資料は1835年（天保6）に撰された仁井田好古による「華岡青洲墓誌銘」である。それには「著す所、瘍科瑣言、産科瑣言、瘍科神書、疔瘡辨名、乳岩辨、天刑秘録、傷寒講義等、凡そ二十七種。皆、其の治術の大意を言う。」<sup>5)</sup>（原漢文）とあって、「丸散便覧」の名は披見されない。遺族によって墓誌銘の撰者である仁井田に示された資料中に青洲の著述が27種とあったことが知られる。1861年に佐藤持敬が春林軒の蔵書目録を作製した際には59種であったので、青洲没直後の遺族による著述の整理が杜撰であったことが分かる。1851年（嘉永4）の浅田宗伯の「皇国名医伝」の「華岡隨賢」の末尾に青洲の著述を列記してあり、瘍科瑣言、産科瑣言、

治痢瑣言、瘍科方筌、瘍科神書、疔瘡辨名、乳巖辨、天刑秘録、青囊秘録、膏方便覧、丸散録、傷寒講義、青洲雑話を示している<sup>6)</sup>。「治痢瑣言」は「華岡氏遺書目録」に見える「痢疾瑣言」のことであり、「丸散録」は本稿で論ずる「丸散便覧」と見て差し支えないであろう。上記以外に江戸期に「丸散便覧」に言及した史料はない。

青洲の事績の本格的な研究は1923年に出版された呉 秀三の「華岡青洲先生及其外科」に始まるが、この中で「丸散便覧」について、呉は上述した佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」<sup>1)</sup>の8番目にその名を示して「與<sub>二</sub>丸散方考<sub>一</sub>大同小異。有<sub>二</sub>青洲先生自序及凡例<sub>一</sub>。」と記している。この注記は佐藤持敬によるもので、呉はその内容の紹介や処方方の引用を一切行っていない。なお、上記の注によって「丸散便覧」と「丸散方考」は異名同書であり、「丸散便覧」には「序」と「凡例」が付されていたことが分かる。呉に次いで青洲の著書に詳しく言及したのは関場不二彦である。関場は1933年に上梓した「西医学東漸史話」（下）において、「丸散方考」について「療法」に傾注した著として「丸散方考 其用法、口述本」とのみ記している<sup>7)</sup>。関場が閲覧した「丸散方考」の写本を今直ちに特定することは出来ないが、後述する天明期に作られたと思われる写本やその後書写された写本には口述の痕跡が全く認められない。大鳥蘭三郎は「明治前日本外科学史」の中で青洲の外科を論じたが、青洲の著書として「瘍科神書」、「瘍科瑣言」、「丸散便覧」、「膏方便覧」、「青囊秘録」、「禁方録」、「乳岩弁」、「青洲医談」、「乳癌治験録」の9種を示しているが、個々の著書についての解説を行っていない。またなぜ多くの著書の中で上記の9種を示したのかも分からない<sup>8)</sup>。これらの中で冒頭からの8種は比較的多くの写本が遺されているが、最後の「乳癌治験録」（「癌」は「巖」の誤り）は現在知られている写本は一本のみである<sup>3)</sup>。

1980年になって「丸散便覧」は「近世漢方医学書集成 三〇 華岡青洲 二」<sup>9)</sup>の中に覆刻されて収載されることになった。底本とされたのは大塚敬節所蔵本であった。解題を担当した宗田

一は「春林軒丸散方」(「丸散便覧」の異名同書)に関して以下のように記している。

#### 春林軒丸散方

青洲創方の「十味敗毒散」はこの『丸散方』にはなく『瘍科方箋』、『疔瘡弁名』に収録されている。(大塚敬節氏蔵)但し、序文(天保十年、一八三九)は別本で補った(同文で寛政二年、一七九〇の日付のものもある)。<sup>10)</sup>

宗田の解説は甚だ不適切であると言わざるを得ない。収載処方数やそれらの内容のデータなどこの著述の全体像を示さずに、特定の処方「十味敗毒散」一方のみを掲げて、この処方本書に記載されず、他書に収載されていると説明されても読者は全く理解できないであろう。「序文(天保十年、一八三九)は別本で補った」と記されているが、補ったはずの序文は欠落して収載されていない。誠に杜撰な編集であった。収載予定であった「序文」の年紀は「天保十年、一八三九」とあるが、この年は青洲が没してから4年経過しているため、青洲による序文とは考えられず、さらに「寛政二年、一七九〇の日付のものもある」とも記しているので、天保の序文と寛政の序文の関係が明らかでなく、「序文」に関しても混乱した記述となっている。このように宗田の解説は「丸散便覧」に関して見るべきものは何もない。

2000年に高橋 均らは華岡本家(札幌)に所蔵されている「丸散便覧序」(5葉)を覆刻して、これを現代語に訳し詳細な解説を付して発表した<sup>11)</sup>。前述したように佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」<sup>11)</sup>には「自序」と「凡例」が付されているとある。高橋らによって「(自)序」が明らかにされたが、「凡例」は依然として詳らかにされていない。しかし、少なくとも「丸散便覧」の成立年が1790年であることが明確にされたことは、青洲研究において一つの大きな進展であったことは間違いない。高橋らはこの写本が華岡本家で見出されたことから青洲の自筆とするが、確定するためには筆跡などの面からさらなる綿密な検証をする必要がある。本稿では一応、高橋らの見解にし

たがう。以上が「丸散便覧」に関するこれまでの研究であるが、その書誌、内容、写本の系統などに関しては殆んど知られていないことが理解される。

### 3. 京都遊学時代の華岡青洲の名と号について

本稿の論を進めるに当たって、青洲の京都遊学時代の名と号に言及することが不可欠である。青洲の名や号については呉はその著書の冒頭に以下のように記している。

華岡青洲先生(寶曆十年-天保六年)。名ハ震。字ハ伯行。青洲ハ其號。俗名雲平。其居室ヲ春林軒ト云フ。(和歴の下の西暦と震、伯行などの右側の横線を省略)<sup>12)</sup>

これは仁井田好古による「華岡青洲墓誌銘」の冒頭「君諱震、字伯行、稱隨賢、別號青洲。」<sup>5)</sup>とあるのを援用したのである。さらに仁井田も恐らく墓誌銘を撰するに際して青洲の遺族から示されたと思われる「華岡先生畧伝」の冒頭にある「先生、姓<sub>ハ</sub>、本為<sub>ス</sub>和田氏<sub>ト</sub>、諱<sub>ハ</sub>震。字<sub>ハ</sub>伯行。號<sub>シ</sub>青洲<sub>ト</sub>、稱<sub>ス</sub>隨賢<sub>ト</sub>」<sup>13)</sup>を参考にしたことは間違いない。何れの史料にも青洲の名を「震」、号を「青洲」としており、呉以後に発行された青洲に関する研究書<sup>14)</sup>においても、呉の記述が殆んどそのまま踏襲されている。しかし、青洲がいつから「伯行」と名乗り、「青洲」と号するようになったかは依然として知られていない。

しかし、2007年、多治比郁夫は中川修亭の伝に關した論考の中で鈴木蘭園門の同窓でもあった青洲に言及し、青洲が京都遊学中に「華岡 泰」と名乗り、「華岡玄洲」と号していたことを明らかにした<sup>15)</sup>。1816年(文化13)に京阪の三書肆から上梓された「律呂弁説」(図1)<sup>16)</sup>の内題の次に「門人 谷好井 花岡泰 中川故 筆録」(図2)とあり、1813年(文化10)に書かれた三浦蘭園の付言によれば、1783年(天明3)に鈴木蘭園が蔡 元定撰の「律呂新書」の講釈をして数十人の門人が筆録したが、互いに得失があって統一で

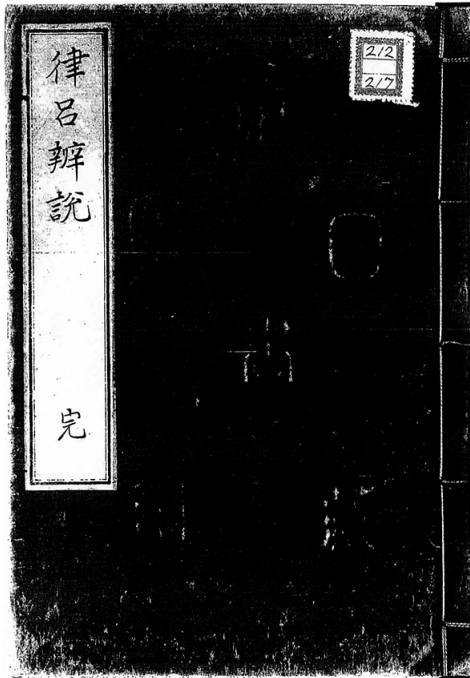


図1 「律呂辨説」の表紙

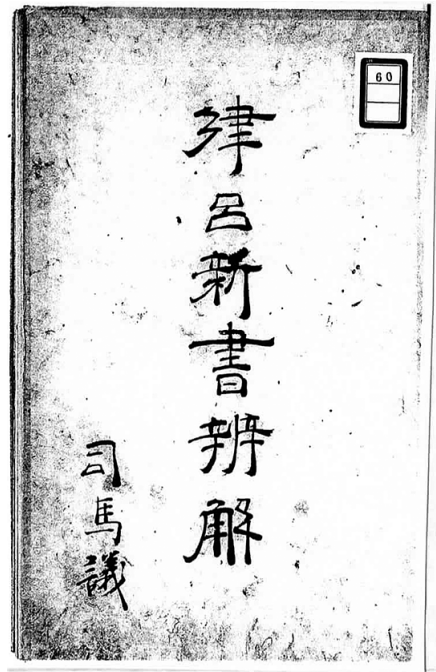


図3 「律呂新書辨解」の表紙(京都大学附属図書館所蔵)

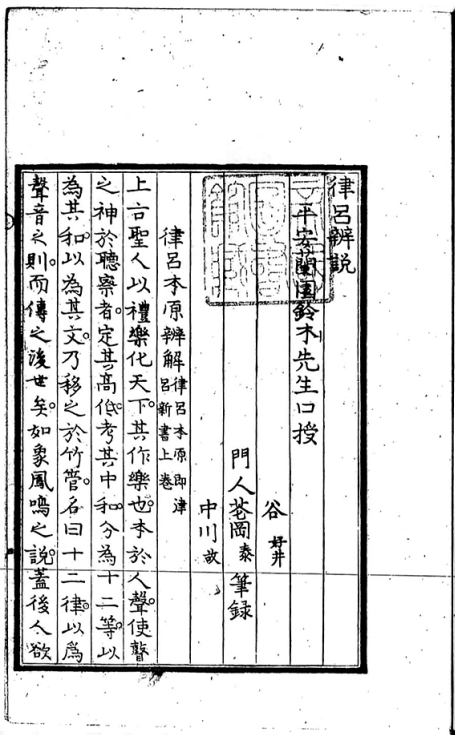


図2 「律呂辨説」本文1丁表。「花岡泰」の名前が見える

きなかった。そこで蘭園は再び講義を行って、谷采薇、岡伯行、中川其徳に句々筆記させた。この3人の筆記を基に校訂して底本が完成したという。多治見は冒頭に示した「谷好井 花岡泰 中川故」のみでは筆録者の特定できないが、三浦蘭阪の付言によって、「谷好井」は土佐の「谷采薇」、「花岡泰」は「伯行」とあることからもちろん「華岡青洲」のことであり、「中川故」は「中川修亭」であると示した。この付言によって、青洲は1783年に鈴木蘭園の門にあってその講筵に列していたことが明らかになった。多治見はもう一つの史料「律呂新書辨解」<sup>17)</sup>を示して、この写本の巻末に取められた中川修亭の1790年(寛政2)3月の後記中に「於<sub>レ</sub>是再起<sub>レ</sub>業、遂<sub>レ</sub>疑解<sub>レ</sub>之、使<sub>レ</sub>花岡玄洲、谷采薇、及故筆<sub>レ</sub>也、業成各離散、既而罹<sub>レ</sub>京師之災、故本已烏有矣。」(図3、4)とあることから、青洲が「玄洲」とも号していたことも明らかにした。当時、青洲と親しく接していた中川修亭の記述であるから確定的な証拠といってもよい。多治比によって青洲の新しい名と号が発掘されたことは青洲研究上大きな進歩であると言わざるをえない。

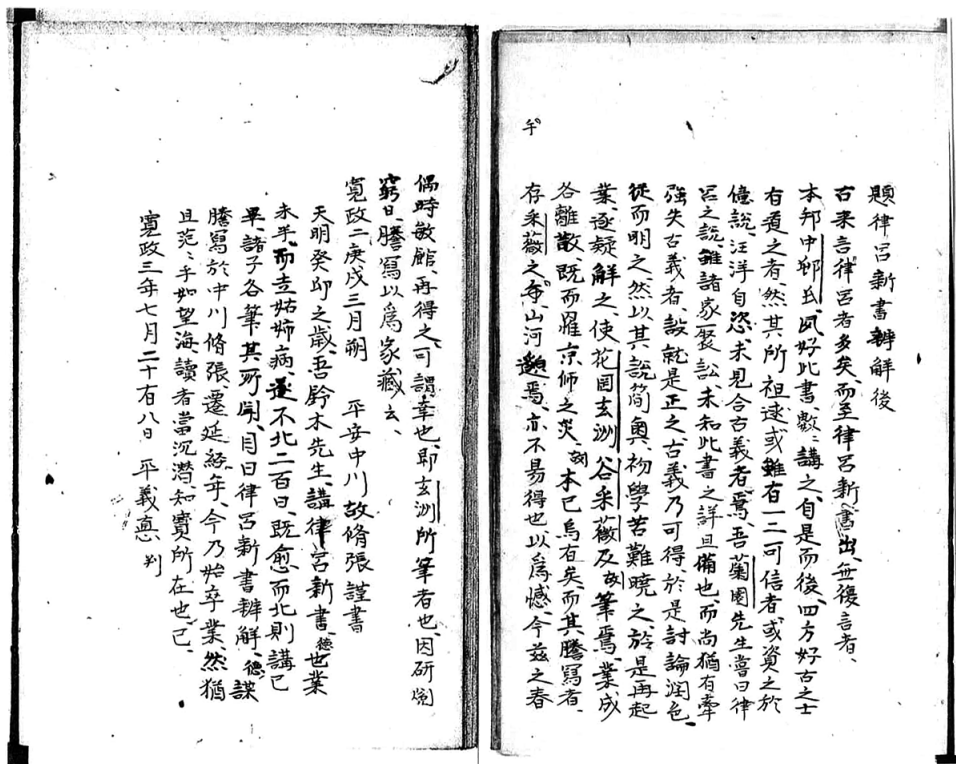


図4 「律呂新書辨解」の中川修亭の後記（京都大学附属図書館所蔵）

当初、著者は名「泰」と号「玄洲」を青洲が蘭園門に在った際のみで使用していたと推測していた。というのは、著者がこれまでに閲覧して来た青洲の著述の写本数百冊にこの名や号を見出すことができなかつたからである。しかし、次節に記すように京都大学富士川文庫所蔵の一写本中に撰者名を「華岡 泰撰」とする「丸散便覧」の一本を見出したことから、著者の推測を確認せざるを得なくなった。

#### 4. 華岡 泰撰の「丸散便覧」の書誌と「丸散便覧序」

京都大学附属図書館の富士川文庫に写本「丸散便覧」（請求番号か238）が所蔵され、富士川文庫 | 京都大学貴重書資料デジタルアーカイブで公開されている。縦26cm、横18.3cm、仮綴じて、表紙を欠くが裏表紙は付されている。全20丁で、四辺単片、有界で半丁は10行、版心に文字は刻されていない。1丁表から2丁表までは「丸散便

覧序」で、末尾に「紀州 青洲 華岡泰撰」とある（図5）。2丁裏は白紙で、3丁表裏は「丸散便覧目次」（図6）、4丁表から19丁裏までが「丸散便覧」の本文で、処方名、生薬、用量、用法が記され（図6の左）、「黄鐘丸」以下「玉竜膏」まで合計31方が収載されている。19丁裏末尾の一行から20丁裏までは「丸散服法」である。丁寧に書写された写本であるが、筆跡から判断すると直ちに青洲の手になるとは考えられない<sup>18)</sup>。このことに関しては将来綿密な検討を要する。以下これを天明本と称する。「丸散便覧序」と収載の処方名は後の考察に不可欠であるから煩を厭わずに以下に示しておく。句読点は著者による。

##### 丸散便覧序

一友人問曰。我毎治疾、按古方訣、以遵其言、焦神苦思、求其肯綮、而不如其言者居多。今、視子之伎一匕所投、便無不應於手而有效矣。実若有養叔於射庖丁於牛者焉。敢問。

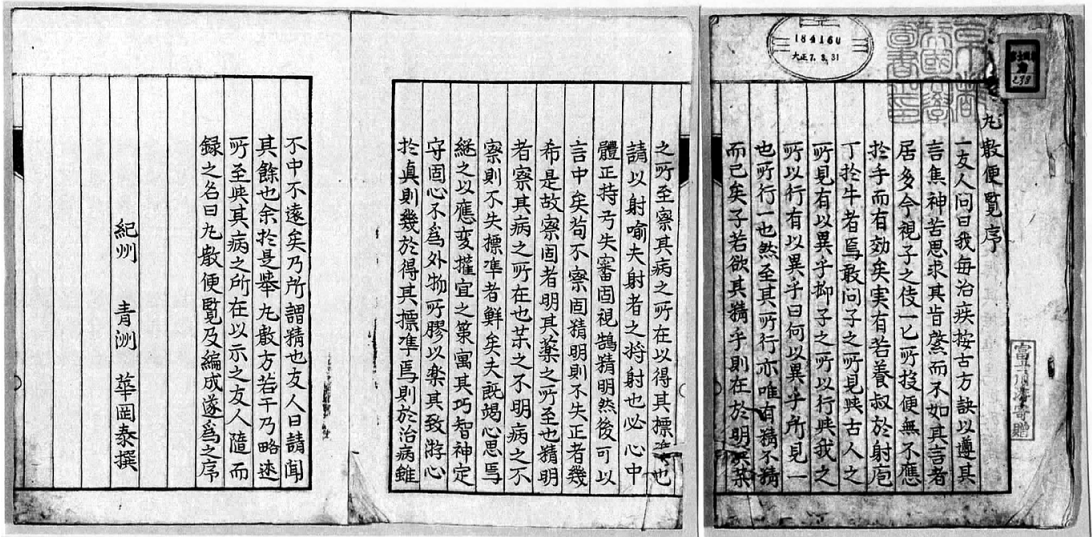


図5 華岡 泰撰の「丸散便覧序」(京都大学附属図書館所蔵)

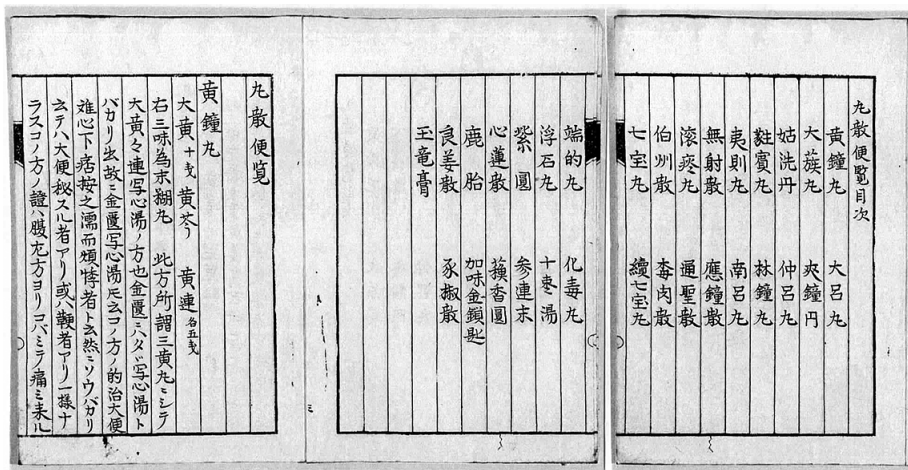


図6 華岡 泰撰「丸散便覧序」の目次と本文の冒頭

子之所見與古人之所見有以異乎。抑子之所以行與我之所以行有以異乎。曰何以異乎。所見一也。所行一也。然至其所行，亦唯有精不精而已矣。子若欲其精乎。則在於明只藥之所至，察其病之所在，以得其標準也。請以射喻。夫射者之將射也，必心中體正，持弓矢審固，視鵠精明，然後可以言中矣。苟不察固精明，則不失正者幾希。是故察固者明其藥之所至也。精明者察其病之所在也。藥之不明，病之不察，則不失標準者鮮矣。夫既竭心思焉，繼之以應變權宜之策，寓其巧智，

神定守固，心不為外物所膠，以藥其致，游心於真，則幾於得其標準焉。則於治病，雖不中不遠矣。乃所謂精也。友人曰。請聞其餘也。余，於是拳丸散方若干。乃略述所至與其病之所在，以示之友人。隨而錄之，名曰丸散便覧，及編成遂為之序。

紀州 青洲 華岡泰撰

冒頭にある「一友人」とあるのは中川修亭のことであろう。前述したように蘭園門の同窓であつ

た。残念ながらこの序は年紀を欠くが、末尾に「華岡泰撰」とあることからすれば、青洲が「泰」と名乗っていた京都遊学時代に執筆されたと推定される。さらに詳しく考察すれば、青洲の京都時代の勉学の順序は、最初に鈴木蘭園などにいわゆる教養科目を習い、次いで吉益南涯に漢方を、そして最後に大和見立、岩永貞吉<sup>19)</sup>にオランダ流外科を学んだと思われ、少なくとも最後の半年-1年は外科の研修に励んだと考えられるから、「丸散便覧」の執筆は1782-4年(天明2-4)になされたと仮定しても事実と懸隔すること甚だしくはないと考える。なおかつ、中川修享の疑問に対して答えたのであるから、青洲が中川と知り合ってから著述であり、したがってこの著述の成立は青洲の1782年(天明2)の上洛前に遡るものではない。「名曰丸散便覧」とあるから書名は青洲自身によるものであり、これで「丸散便覧」が原初の書名であることが確定する。

次に収載された31方の処方名を以下に列記しておく。これらの処方名は青洲の医学の思想的萌芽を考慮する上で重要である。用量、用法は省略する。

黄鐘丸、大呂丸即備急丸、大簇丸即人參大黃丸、夾鐘丸、姑洗丹、仲呂丸即如神丸、蕤賓丸即平水丸、林鐘丸、夷則丸即浮石丸、南呂丸即滾痰丸、無射丸即牡蛎角石散、應鐘散、滾痰丸、防風通聖散(目次には「通聖散」とある)、伯州散、梅肉散、七宝丸、續七宝丸、端的丸即退舎丸、化毒丸、浮石丸、十棗湯、紫圓、參連末、心蓮散家方、蘇合香圓、鹿胎、加味金鎖匙、良姜散、豕椒散、玉竜膏

用法の文章にはいずれも「師曰」、「先生曰」などの青洲が口述した形跡は全くなく、文章自体が門人による口述の筆録ではないことを示している。

注目すべきは冒頭の「黄鐘丸」から「應鐘散」までの十二方は、「應鐘散」の用法の末尾に「右十二方ハ所謂十二管丸散ナル者ニシテ東洞常ニ用ラル、所ノ方也」とあるように、いわゆる吉益東洞の「十二律方」である<sup>20)</sup>。青洲の最初の著述で

ある「丸散便覧」の冒頭に東洞の十二律方を記述し、それらに対する青洲なりの見解を示していることは、青洲が早くから東洞の医術に注目していたことを示唆するものであるし、なおかつ「丸散便覧」の冒頭に十二律方を記してその解説を述べていることは、中川修享の質問に答えるという目的もあったが、青洲の主目的が十二律方の解説ではなかったかということ強く類推させるものである。このことは、青洲が東洞の息南涯に師事した事実からすれば一見当然のことのように思われるが、青洲が医学思想的に東洞の強い影響を受けたことは、著者が指摘するまで誰も指摘してこなかった<sup>21)</sup>、上記の事実は青洲が早くから東洞の医術に関心を示し、東洞に傾倒し始めていたことを示唆する。さらに、青洲が上洛して幾何も経たない時期に、東洞の処方に加えて各種の処方に対する青洲なりの考えを述べていることは、青洲が上洛以前に父直道の下でこれらの処方を含めた漢方の修練を相当積んでいたことを窺わせるものである。何れにしても、青洲は1782-4年(天明2-4)頃に「丸散便覧」を撰していることは間違いない。

## 5. 華岡青洲自筆の「丸散便覧序」

第2節において、高橋ら<sup>11)</sup>が2000年に青洲自筆の「丸散便覧序」を覆刻して現代日本語に訳し詳細な解説を付して発表したとしたが、「丸散便覧」に「丸散便覧序」が付されている写本とそれを欠く写本があることは知られていた。例えば著者旧蔵の1848年書写の写本は序を有するが、もう一本(書写年不詳)はこれを欠く<sup>22)</sup>。多くの写本は序を欠くが、序を有する写本においても写本間で序の字句にかなりの異同がある。当初、著者はこの異同を単純に書写に伴う誤記や字句の脱落に起因すると考えていた。

しかし、上述した華岡泰撰の「丸散便覧序」と高橋らによって覆刻された青洲自筆の「丸散便覧序」(図7)を比較することによって、字句の異同は書写に伴う誤記、脱落というよりも、むしろ1790年における青洲自身の校訂に伴う異同であることが明らかになった。比較に便利であるよう

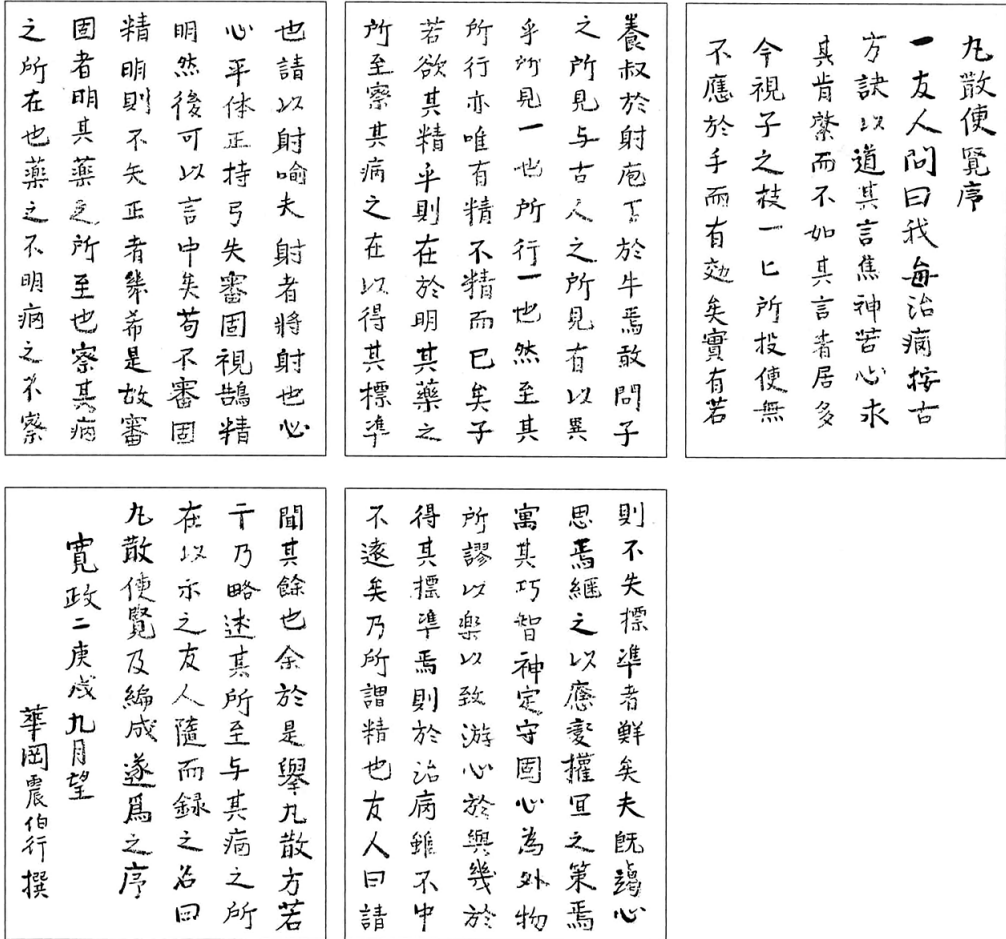


図7 「丸散便覧序」(文献11から高橋 均博士の許可を得て転載)

に以下に一行ずつ両者を併記するが、下線を施したのは青洲自筆の「丸散便覧序」である。両本で異なる字句や欠落している字句に網掛けを施している。

一友人問曰。我每治疾，按古方訣，以道其言，焦神苦思，求其肯綮，而不如其言者居多。  
 一友人問曰。我每治病，按古方訣，以道其言，焦神苦心，求其肯綮，而不如其言者居多。

今，視子之伎一匕所投，便無不應於手而有効矣。實有若養叔於射庖丁於牛者焉。敢問。子今，視子之伎一匕所投，便無不應於手而有効矣。實有若養叔於射庖丁於牛者焉。敢問。子

之所見與古人之所見有以異乎。抑子之所以行與我之所以行有以異乎。曰何以異乎。所見一之所見與古人之所見有以異乎。  
 所見一

也。所行一也。然至其所行，亦唯有精不精而已矣。子若欲其精乎。則在於明其藥之所至，也。所行一也。然至其所行，亦唯有精不精而已矣。子若欲其精乎。則在於明其藥之所至，

察其病之所在，以得其標準也。請以射喻。夫射者之將射也，必心中體正，持弓矢審固，視察其病之在，以得其標準也。請以射喻。夫射者之將射也，必心中體正，持弓矢審固，視



鵠精明，然後可以言中矣。苟不察固精明，則不失正者幾希。是故察固者明其業之所至也。

鵠精明，然後可以言中矣。苟不審固精明，則不失正者幾希。是故審固者明其業之所至也。

精明者察其病之所在也。業之不明，病之不察，則不失標準者鮮矣。夫既竭心思焉，繼之以  
 察其病之所在也。業之不明，病之不察，則不失標準者鮮矣。夫既竭心思焉，繼之以

應變權宣之策焉，寓其巧智，神定守固，心不為外物所膠，以樂其致，游心於真，則幾於得  
 應變權宣之策焉，寓其巧智，神定守固，心為外物所膠，以樂以致，游心於興 幾於得

其標準焉。則於治病，雖不中不遠矣。乃所謂精也。友人曰。請聞其餘也。余，於是拳丸散其標準焉。則於治病，雖不中不遠矣。乃所謂精也。友人曰。請聞其餘也。余，於是拳丸散

方若干。乃略述其所至與其病之所在，以示之友人。隨而錄之，名曰丸散便覽，及編成遂為  
 方若干。乃略述其所至與其病之所在，以示之友人。隨而錄之，名曰丸散便覽，及編成遂為

之序。 紀州 青洲 華岡泰撰  
 之序。 寛政二庚戌九月望

華岡震伯行撰

両写本の「序」の字句の違いについて少し解説する。一行目の「疾」と「病」，「遵（したがう）」と「道（いう）」，「思」と「心」は意義において基本的に大きな違いはない。「遵」の方が「道」よりも適切でないかと思われるが，「苦思」と「苦心」はどちらが適切か判断することは難しい。三行目において青洲自筆の序で21字が削除されていることは注目すべきである。これは単なる書写上の問題ではなくして，青洲が意識的に削除したと考えられる。この直前の文「子之所見與古人之所見有以異乎」の繰り返しになると考えたからであろう。削除しても全体の文意は変わらない。5

行目について，自筆の序の「在」は「所在」が正しく「所」が欠落している。「夫射者之將射也」の「之」は自筆の序で削除されているが，高橋らの解説では原典である「禮記」では「之」を欠く。「心中體正」と「心平体正」はいずれも「禮記」に披見され，どちらが正しいとも言えない。6行目について見ると，2カ所の「察固」は前文に「審固」とあるのでこれが適切で，自筆の序の方が正しい。しかし自筆の序で「不失正者」とあるのは明らかに「不失正者」の誤記である。7行目について見ると，自筆の序では冒頭の「精明者」を欠くが，文意がより明確になる。8行目について，最初の句において自筆の序では「焉」を補って一応文の区切りであることを明示しているので問題はない。「心為外物所膠」は明らかに「心不為外物所膠」の誤記である。次の2句の字の違いはいずれも自筆の序の方が適切で，例えば「以樂其致」でも文意が通じないことはないがすっきりしない。次の句の「真」も自筆の「興」の方が正しいと思われる。直前の句に「以樂以致」とあり，「心」を自由に遊ばせるのであるから「真」よりも「興」の方が適切であろう。高橋らは「興」ではなく「興幾」の「幾」が欠落したとして「幾」を補って読むが，その必要は全くない。その次の句で自筆の序では「則」を欠くが，全く文意に影響はない。最後の10行目であるが，自筆の序では「略述所至」に「其」が補われて「略述其所至」となり，文意が明確になっている。末尾の撰者については，自筆の序では「寛政二庚戌九月望 華岡震伯行撰」となって年紀が記述され，名も「泰」から「震」に改められている。「華岡泰撰」の写本で「紀州」と書かれているのはこの写本が「京都」で書かれたからであり，自筆本ではもちろん西野山の平山で書かれたから「京都」と書く必要がなかったと考えられる。

総体的に見ると，自筆の序は2カ所の誤記（「失」を「矢」，「不」の脱落）が認められるものの，他の多くの箇所適切に訂正がなされており，1782-4年に執筆した「丸散便覽序」を青洲が1790年に校訂したことが明らかになった。何かしらの必要に迫られて青洲は「丸散便覽」の改

定を行い、その際に「丸散便覧序」も校訂したとするのが妥当であろう。残念ながら、この時、同時に改められたと思われる本文や凡例は失われて今に伝えられていない。

## 6. 「丸散便覧」の写本の系統

上述したように、1782-4年（天明2-4）に青洲は「丸散便覧」を撰し、それに「丸散便覧序」を付した。これには「凡例」が付されていなかったと推測される。以下これを天明本と称する。さらに青洲は1790年（寛政2）に「丸散便覧序」を改訂した。本文の処方が増補されたか否かについては、現在、1790年に書写された写本は知られていないが、これを仮に寛政本とする。「丸散便覧序」を有する写本は全体として少ないが、序の違いによって天明本と寛政本に分類されるはずである。しかし、実際は複雑で、天明本の「丸散便覧序」の文章でありながら、その年紀を「寛政二年」とする写本がある。例えば、著者旧蔵の一本<sup>22)</sup>は寛政本に欠落した「抑子之所以行與我之所以行有以異乎。曰何以異乎」を含んでいるので天明本の系統ではあるはずであるが、序の年紀は「寛政二年」とある。処方数も大幅に増えている。このような事実を考慮すると、書写が繰り返される経過の中で、両本の混交が生じ、序は改められ、あるいは脱落して処方数も次第に増加したと解釈するのが妥当な見解であろう。

著者の調査では、「丸散便覧」の写本で寛政年間に書写されたものは披見されず、確認される最も古い写本は、高橋 均博士所蔵の「丸散便覧」（高橋コレクション、資料番号629、整理番号0198）であろう。以下に示すようにこの写本は合冊であるが、「丸散便覧」の部分以下高橋本と称する。全18丁の写本であるが、末尾の識語は次のように記されている（図8）。

文化六年己巳夏五月廿日 於青洲華岡先生塾  
守安瑞畏卿甫写之  
同歳冬十一月 日 於東都邸中写之

「守安瑞畏卿甫」が春林軒で書写した写本を第

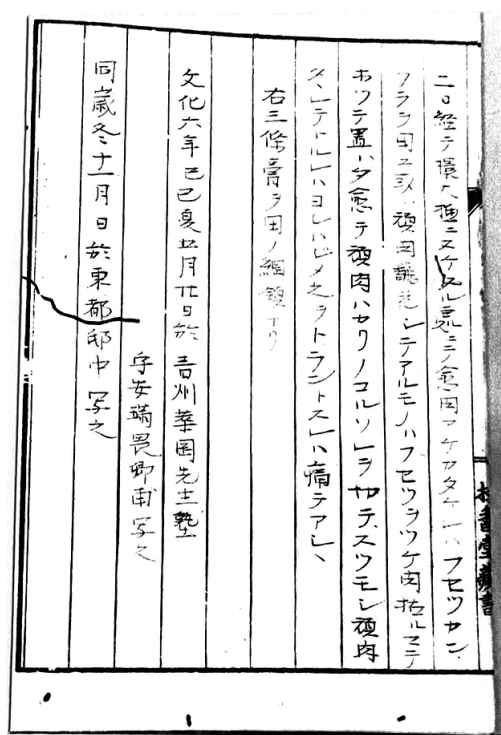


図8 「丸散便覧」（高橋コレクション、資料番号629、整理番号0198）末尾の識語、高橋 均博士の許可を得て転載）

三者が江戸で再書写した写本であるが、書写者、書写年が明らかであるので信頼に足る写本である。守安は春林軒門人録に見える備中からの入門者で「同（文化）六、四、八 窪屋郡三軒茶 守安畏卿」とある<sup>23)</sup>。梶谷の編になる門人録では、入門日は同じであるが、住所は「備中窪屋郡西郡村三軒屋」となっている<sup>24)</sup>。守安の入門期日と「丸散便覧」の書写の時期に整合性があり、何ら不都合の点はない。守安が勤勉で、しかも能筆であったことは、この写本の原本を書写した「文化六年己巳夏五月廿日」の10日後に赤石希范が編集した「乳癌図」（仮題）を清書して青洲に提出したことが知られる<sup>25)</sup>。

高橋本は仮綴じで表紙に題箋はなく、左右双辺有界で、半丁10行。版心に「桂香堂蔵書」とある。1丁表裏に「丸散便覧序」、2丁表から「丸散方考」となっており、見出しは「十二丸散」の「黄鐘丸」以下12方、「毒剂」の「防風通聖散」以下の9方、「下剂」の「滾痰丸」以下6方、吐剂の「泔湯丸」

の1方、雑方は「参連末」以下5方が12丁表の半ばまで記されている。処方数は合計33方である。12丁表の半ばから同裏の8行までは「丸散用法」、それに続いて「同法拾遺」が15丁表の2行まで記述されている。続いて「貼膏方考」が17丁裏8行まで「シンミヤウ」以下12方が記され、さらに18丁裏5行まで「貼膏要法」が書かれている。すなわちこの写本は「丸散便覧」、「貼膏方考」、「貼膏要法」の合冊である。この「丸散便覧」を高橋本とする。高橋本は33方を収載するが、天明本にある「鹿胎」、「豕椒散」、「玉竜膏」は収められていないが、「五宝丹」、「生々乳」、「通経丸」、「抵当丸」、「泔油丸」の5方が追加されているので、結局2方増えて33方となっている。処方数やそれらの記載順序からすれば、高橋本は天明本の形態をよく保っていると言えよう。また「丸散服法」に続いて「同法拾遺」が約2丁記されているが、この「同法拾遺」は天明本には見られないので、恐らく1790年の寛政本で追加されたものであろう。「同法拾遺」の文体は「丸散服法」のそれに近似して青洲自身による文章であることが強く示唆されるからである。高橋本は天明本の内容を殆んど継承しているといってもよい。

高橋本から少し遅れて1814年頃に書写されたと推定されるのは早稲田大学所蔵の一本「春林軒丸散方記」(21丁、請求番号ヤ090-00380)である。撰者を「青洲花岡先生 撰」とする。「青囊秘録」、「春林軒膏方便覧抜粹」と合冊されている。この写本の「春林軒丸散方記」を早稲田本と称する。書写年は明記されていないが、合冊された「青囊秘録」の書誌学的考察と「青囊秘録」と同筆であることから、この写本は1814年頃に書写されたと推定される。「序」を欠いている。無辺無界で、半丁に10行記されている。見出しはなく、適応別にも記述されていない。総計103方が収載されているが、因みに冒頭の10方を示すと、端的丸、鼯鼠丸、竜門丸、消毒丸、五星化毒丸、甲字化毒丸、鷄蔓丸、黄雌雛丸、甲子三黄丸、回天神秘丸である。天明本、高橋本に見られる東洞の十二律方は一方も見出されない。このことは、この頃になると、天明本、高橋本から大きく逸脱

変容し、処方数も大幅に増加した写本が作られたことを示している。

次に書写年代が古いのは、1820年(文政3)書写の京都大学富士川文庫所蔵の「丸散方考」(内題は「丸散便覧」、請求番号カ325)と同じく1820年の書写になる早稲田大学所蔵の「春林軒丸散録」の2本である。先ず前者について記す。本写本は富士川文庫 | 京都大学貴重書資料デジタルアーカイブで公開されている。全19丁で、19丁裏の識語によって1820年に篠原敬五が書写したことが知られるが、篠原は春林軒の門人ではない。彼は華岡流の医術を学ぶのに熱心であったと思われ、前年の1819年に大坂の中島で赤石希范の手になる「乳巖図」を書写していることは、慶応大学所蔵本(請求番号F@=@16)によって知られる。富士川本の表紙の題箋「丸散便覧」は後に貼った張り紙である。内題は「丸散便覧」であるが、本文では「丸散方考」となって混乱している。1丁表裏は「丸散便覧序」であるが、青洲自筆の寛政本の序で削除されている21字が見られるので、天明本の系統であることが分かる。2丁表から5丁裏まではいわゆる東洞の十二律方、6丁表から「毒剂」など見出しがあって「防風通聖散」以下21方が14丁表まで記されている。計33方である。14丁裏から18丁裏までは「丸散用法」と「用法拾遺」が記され、19丁表は白紙で、19丁裏に篠原の識語がある。以上によってこの写本は高橋本の形態を殆んどそのまま遺していることが分かる。

もう一本の早稲田大学所蔵本「春林軒丸散録」は「丸散方考」、「諸家丸散方」との合冊本で42丁。巻龍淵迪吉が1820年(文政3)に書写した写本であるが、「丸散便覧序」はない。この人物も春林軒の門人ではない。収載する処方は「端的丸」から「苦買散」まで95方である。第14番目の「太簇丸」から25番目の「黄鐘丸」までのまとまって記された12方は東洞の十二律方である。総じてこの写本は天明本、高橋本の痕跡を残しているもの、大きく変容して収載処方数も約3倍に増加している。上述した早稲田大学所蔵の「春林軒丸散方記」(請求番号ヤ090-00380)に近く、冒頭

の十数方は「春林軒丸散方記」と共通するものが多いが、十二律方を欠くこの写本とは異なる系統の写本と見做してもよい。

「近世漢方医学書集成30」（華岡青洲 二）に覆刻された「春林軒丸散方」<sup>9)</sup>は、書写者、書写年が明らかでないものの、以下の理由によって、1820年頃の書写になるものと思われる。外題、内題共にこの題名である。無辺無界で、半丁10行。全23丁。「丸散便覧序」を欠く。1丁表から2丁裏までは「春林軒丸散方目録」(95方)である。3丁表の冒頭に内題の「春林軒丸散方」とあり、次行から処方、適応、用量、用法が記述されている。最初の「端的丸」から最後の23丁裏の「排膿散」まで96方が記述されており、目録より1方多い。また目録と本文の間に若干の齟齬が認められる。つまり目録にあって本文になく、目録になくて本文にある処方が若干ある。第16方から27方までは東洞の十二律方がまとめて記述されている。全体の処方数、十二律方がまとめて記載されていること、処方の順序から考察すれば、1820年に巻竜淵迪吉が書写した「春林軒丸散録」（早稲田大学所蔵本）に近似しているといえる。この写本は書写の年紀を欠くが、処方数から考えて1820年代の写本と推定される。

次に書写年が明らかで古いのは東京大学附属図書館鶯軒文庫所蔵の「華岡家丸散便覧」（内題は「丸散便覧」）である。請求番号はV11-1081である。この写本は「丸散便覧」と「丸散方考」の合冊であるが、両者は同筆と思われ、後者の末尾に「天保二辛卯秋九月 肥後 平山文叔写之」とあるので、1831年（天保2）の書写本である。この「丸散便覧」を以下鶯軒本A、「丸散方考」を鶯軒本Bと称する。先ず鶯軒本Aから述べる。本文は無辺無界、原則として半丁に10行記されている。全30丁で、1丁表裏は「丸散便覧序」である。青洲自筆の序で削除されている21字の最初の16字はそのまま記されているが、残りの5字は欠落している。書写に伴う誤り、脱字が散見する。例えば21字の冒頭は天明本、高橋本では「抑」であるが、本写本では明らかに誤りである「柳」となっている。これに続く「所行一也」は天明本、

寛政本に見える語句であるが、本写本では欠落している。2丁か表から30丁表までが本文であるが、本書は「丸之部」（13丁裏まで71方）、「散之部」（14丁表から27丁裏まで107方）、「丹圓之部」（27丁裏から30丁表まで10方）に分類されている。30丁表の末尾に「東洞翁有十二律之方皆略而不載」とある。収載処方数は合計188方である。したがって早稲田大学所蔵の「春林軒丸散方記」と共通する処方が多いが、本書では「丸之部」、「散之部」、「丹圓之部」に分類されているので、処方の順序は大幅に異なっている。次に鶯軒本Bについて述べる。鶯軒本Aと同じく無辺無界、半丁に10行記されている。全14丁。1丁表の冒頭に「丸散方考」とある。序はない。1丁表の「端的丸」から始まって10丁表の「應鐘散」まで32方が収載され、10丁表から同裏までは「丸散用法」、11丁表から13丁表までは「同法拾遺」となっている。13丁裏から14丁裏までは水虫の薫葉、通拈散、ヘイサラバサラなどについてメモ的に記している。32方中には東洞の十二律方が含まれている。天明本にある「梅肉散」、「鹿胎」、「豕叔散」、「玉竜膏」が欠落しているが、代わって「五宝丹」、「竜門丸」、「通経丸」、「抵当丸」、「速攻養命丸」が記載されているので、天明本より1方多い32方となっている。序が欠落しているが、処方数が32方であること、その中に東洞の十二律方が含まれていることを考慮すると、この鶯軒本Bは天明本の痕跡を色濃く残しているといえることができる。

1850年（嘉永3）青洲の高弟本間玄調（以下「玄調」）は、青洲の著述が書写の繰り返しによって同名異書、異名同書が出現し、修学にも困難を来している状況を憂いた。そして数年をかけて青洲の著述の写本を収集し、後世に伝えるべき著述21種を選定して「春林軒二十一種」計15集としてまとめた。その8集に「膏葉便覧」、「膏葉附録」と共に「丸散便覧」が「春林軒丸散録」、「丸散方考」として収載されている。この集によって「春林軒丸散録」は「丸散便覧」の異名同書であることが分かるし、佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」<sup>1)</sup>の条で述べたように「丸散方考」も異名同書であ

る。玄調がなぜ同じ著述を併せて採用したかはよく分からない。因みに「二十一種本」の「春林軒丸散録」(21丁)は東洞の十二律方を含む109方を収載しているが序を欠く。「丸散方考」(18丁)も序を欠いており、東洞の十二律方を冒頭に記して、以下、毒剤(9方)、下剤(6方)、吐剤(1方)、雑方(5方)、丸散用法(5条)、用法拾遺(11条)が記されている。玄調がなぜ序を欠く不完全な写本を「二十一種本」として選択したのか理解に苦しむ。

「丸散便覧」の写本の多くは書写者が不明で、書写年も明らかでない。その上「丸散便覧序」を欠いている。したがって、このような写本をいくら調査しても「丸散便覧」の成立の経緯を知る上で有意義な情報を得ることは出来ない。このような写本の中で少し特異的な一本が研医会図書館所蔵の「春林軒丸散録 完」(内題は「丸散録, 分野別番号2899」)である。亀甲模様の青色の表紙に直接外題が墨書されている。四辺単片有界で、半丁10行。全61丁。序を欠く。丸薬、散薬に分類されておらず、適応別にも記述されていないが、一部で症状別に処方記されている個所がある。片倉元周の「青囊瑣探」など諸書からの引用も見られることは他の写本にない特徴であるが、最も注目すべきは収載処方数であり、その数は310数方に上る。310数方としたのは独立した処方として認めてよいかどうか判断に苦しむ処方が含まれているからである。この処方数は、天明本、高橋本の処方数の約10倍、1820年書写の早稲田大学所蔵の巻龍淵による書写本収載処方数95方の約3倍である。処方数から考察すれば、二十一種本よりも後の最幕末期に完成したとするのが妥当であろう。一般的に時の経過とともに処方が追加される傾向にあるからである。もっとも注目すべきは、24丁裏の「治痘瘡倒靨一奇方<sub>同</sub>」の次に全く関連のない難産後の尿道破裂の治療法、25丁表には麻薬の煎じ方、膈噎の処方、臍瘡の処方が記され、その次に以下の記述がある。

○麻薬ヲ十二三ノ童ニカケシニ、死シケル事アリ。故ニ先生ニ尋シニ、未タ応セサル内ニ治

ヲ施セハ、痛ニ堪スシテ、心ニ及テ死スル事アリ。心得ヘシ。

この記述は甚だ重要で、術者、患者、手術内容、期日などについて何ら具体的に知られるところはないものの、麻沸散(湯)による死亡例があったことを示している。ここでは手術中に患者が死亡した麻酔死であったことが分かる。麻沸散(湯)による死亡の記述は珍しい。また、「故ニ先生ニ尋シニ」とあるので、手術を行ったのは「先生」ではなかったことが示唆される。ここに記された「先生」は「青洲」とは限らない。春林軒で青洲の後を継いだ鷺洲(名は修平)、鹿城(良平)、その没後、合水堂を主宰した南洋(準平)や積軒(名は良平、鹿城の三男)の可能性もある。特定することは極めて困難である。

## 7. おわりに

青洲は京都遊学中の1782-4年にかけて、恐らく中川修亭の要望に応じて吉益東洞の十二律方を中心とする31方を収めたいわゆる天明本の「丸散便覧」を撰し、処方を解説した。その解説に至る経緯は「丸散便覧序」に記されている。現在のところ青洲の最も古い著述であり、「丸散便覧」は青洲自身の命名であると考えられる。1790年に至って、何らかの理由に迫られて青洲は「丸散便覧序」を改訂した。翌1791年に中川修亭に「禁方(拾)録」を編集させていることから推察すると、1790年の数年前から奇(禁)方の収集に力を注いでいたと思われるから、このことと関係するのかも知れない。1809年頃までは「丸散便覧」の写本は天明本の形態を有していたと思われるが、1820年頃にはその収載処方数が90数方と天明本の3倍に増加した。そして「丸散便覧序」を欠く写本が多く作られ、1850年頃の写本、例えば本間玄調が編集した「二十一種本」では処方数はさらに増えて109方となり、新しい処方が追加された。天明本によって「丸散便覧」の成立年は従来の定説1790年を6-8年遡り、また青洲の京都遊学時代の漢方処方に対する知識がすでに相当の水準にあったことが理解される。

稿を終えるに当たり、貴重な写本の閲覧、複写に便宜を与えられた高橋 均博士、研医会図書館（安部郁子館長）に深謝の意を表す。また、本稿で利用した写本を所蔵する各施設にもお礼申し上げる。

### 参考文献および注

- 1) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂書店；1923. p.381-387
- 2) 松木明知. 華岡青洲の撰による「禁方（拾）録」に関する研究. 日本医史学雑誌 2018；64(3):257-280
- 3) 華岡青洲. 乳巖治験録（写本）天理大学附属天理図書館所蔵. 請求番号 498 イ 1.  
松木明知. 華岡青洲の新研究（弘前：松木明知；2002）の巻頭に全丁カラー写真で示している。
- 4) 松木明知. 華岡青洲の撰による「統禁方録」に関する研究. 日本医史学雑誌 2018；64(3):281-297
- 5) 松木明知. 華岡青洲研究の新展開. 東京：真興交易（株）医書出版部；2013. p.45-55
- 6) 浅田宗伯. 皇国名医伝. 1851. 卷之下 25 丁表-26 丁表
- 7) 関場不二彦. 「西医学東漸史話」（下）. 東京：吐鳳堂書店；1933. p.290
- 8) 大鳥蘭三郎. 明治前日本外科学史. 日本学士院日本科学史刊行会編. 明治前日本医学史. 第四卷. 東京：日本学術振興会；1964. p.807
- 9) 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成 三〇. 華岡青洲 二. 東京：名著出版；1980. p.137-186
- 10) 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成 二九. 華岡青洲 一. 東京：名著出版；1980. p.60
- 11) 高橋 均, 松村 巧. 華岡青洲自筆「丸散便覧」考—現代語訳および注解—. 近畿大医誌 2000；25:161-164
- 12) 文献 1. p.1
- 13) 文献 5. p.39-45
- 14) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖 華岡青洲先生. 和歌山：医聖 華岡青洲先生顕彰会；1964. p.6
- 15) 多治比郁夫. 中川修亭伝史料（上）. 混沌（大阪芸文研究）. 2007；(31):10-20
- 16) 鈴木蘭園. 律呂弁説. 浪華書肆他. 文化 13 年.
- 17) 律呂新書弁解 京都大学附属図書館所蔵. 請求番号 60 リ 7.
- 18) 青洲が京都遊学中の天明 4 年に書写した「紅毛外科集」という自筆の写本が知られている（大阪市史編纂所中野操文庫所蔵. 請求番号 490 和 334）. この写本の筆跡と華岡泰撰の「丸散便覧」の筆跡を比較して見ると明らかに異なる。
- 19) 松木明知. 華岡直道の外科の師の岩永氏と青洲の外科の師岩永氏について. 華岡青洲研究の新展開. 東京：真興交易（株）医書出版部；2013. p.99-108.
- 20) 鈴木達彦. 吉益東洞十二律方の検討. 日本東洋医学雑誌 2012；63(1):15-24
- 21) 松木明知. 華岡青洲の医学に対する思想. 日本医史学雑誌 2018；64(1):3-18
- 22) 公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋編. 杏雨書屋「松木文庫」解説・目録. 大阪：公益財団法人武田科学振興財団；2014. p.297
- 23) 文献 1. p.489
- 24) 梶谷光弘編. 華岡直道・青洲・鷺洲・厚堂が主宰した華岡家へ入門した門人たち. 華岡青洲研究事業研究論文. 2017；(1):1-76.
- 25) 松木明知. 春林軒門人赤石希范による乳癌手術図譜出版の計画. 日本医史学雑誌 2016；62(3):305-314

# A Bibliographical Study on *Gansanbenran* Compiled by Seishu Hanaoka, With Special Reference to the First Compilation Year

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

At the beginning of Seishu Hanaoka's visit to Kyoto in a period between 1782 and 1785, he studied liberal arts under Ran-en Suzuki, a physician who was also a player of a zither-like Japanese musical instrument. The transcription by Seishu and others of Ran-en's lectures on Chinese melody tells that another of Seishu's names was *Tai*, with a pseudonym of *Genshu*. Therefore, a manuscript titled *Gansanbenran*, compiled by *Tai Hanaoka*, (not by his own hand) clearly indicates that the manuscript appeared during 1782 and 1784, considering the circumstances of Seishu's study of herbal medicine and surgery in Kyoto. The manuscript was most likely written responding to his friend Shutei Nakagawa's request. It describes 31 extra-traditional herbal prescriptions, including Todo Yoshimasu's *Juniritsuho*, meaning twelve pills and powders, and it has Seishu's annotations. Although *Gansanbenran* was considered to have been compiled in 1790, its first appearance year should be corrected as being 1782–4, according to the newly-found manuscript compiled by *Tai Hanaoka*.

**Key words:** Seishu Hanaoka, Tai Hanaoka, Genshu Hanaoka, *Gansanbenran*, the first appearance year